

開催地名：富山県砺波市	
開催日時	令和4年11月22日（火） 19：00 ～ 20：30
開催場所	砺波市庄川生涯学習センター
語り部	菅井 茂 （宮城県仙台市）
参加者	砺波市防災士連絡協議会 約 120 名
開催経緯	<p>当市には、今後 30 年以内に地震が発生する確率が最も高いとされる「S ランク」に位置づけられる「砺波平野断層帯東部（高清水断層）」が市内を縦走しており、さらに、平成 29 年 12 月に富山県が発表した地震被害想定において、市内で初めて震度 7 の地震が発生する可能性が示されるなど、地震による被害が危惧されている。また、平成 30 年に土砂災害の発生危険がある地区を対象に避難情報（避難準備・高齢者等避難開始）を発令し、避難所を開設したが、行政、自主防災組織及び住民等ともに多くの課題も残った。災害経験の少ない本市において、今後起こりうる各種災害への対応について、実例を踏まえた訓練の実施などは困難な状況にある。</p>
内容	<p>（１）大震災発生時の状況</p> <p>私は、県内にある鳴子温泉から自宅へ帰宅する際に、岩出山というところで大きな揺れに遭遇した。「これはただごとではない」と感じ、すぐに地元で連絡をとろうとしたが、電話はすべて不通となっていたため、取りあえず細心の注意を払い、停電のため真っ暗闇の中、何とか地元へたどり着くことができた。</p> <p>帰宅後、自宅がめっちゃめっちゃな状態だったのは予想通りだったが、一番気掛かりだったのが地域住民の安否だったので、直ちに最寄りの南材木町小の避難所へ駆けつけた。ここから、町内会連合会長の立場として地元地域被災者の受け入れと、津波によって行き場を失った他地区の被災者の受け入れ対応に奔走することになった。</p> <p>（２）避難所に詰めかける人々</p> <p>地震発生後、私は南材木町小学校で避難所開設の準備をしていた。20 時前に、水と乾パンを全員に配り、その際に 905 名が避難していることが判明した。避難者数は最終的には 1,200 名になった。仮設トイレを北側にも設置したが、寒くて誰も使用しなかったため、翌日に急遽東側に作り直した。また、自家発電機は 2 基あったが 1 基は作動しなかった。こうしたことも、日頃からのチェックが必要であると反省した。3 月 11 日の夜、避難所運営委員会を立ち上げ、役割を分担し、ボランティアを募った。その結果、若い人が寝ずの番でトイレ番をしてくれるなど、トラブルもなく運営できた。</p> <p>避難所の起床は 6 時半、朝食が 8 時、夕食が 17 時と決めた。地区内で倒壊家屋はなく、断水だけだったので、帰れる方は帰宅して食べていただくようご案内した。また、ライフラインが復旧したら帰ってほしいとあらかじめお伝えしていたこともあり、10 日後の 3 月 21 日には全員速やかに帰宅してもらった。</p> <p>（３）避難所運営がうまくいった要因</p>

私は3月13日からは八軒中学校の避難所へ行った。こちらには460名の避難者がいた。避難所は避難した人たちのホームである。地区の代表者を係に決め、少しでも住みやすい環境を作るために、希望や不満を伺った。その結果、毎日ラジオ体操を実施することや、女性には食事の献立を決めてもらい、調理してもらうことを決め、すぐに実行した。

また、八軒中学校合唱部は、3月19日の全国大会に出場予定であったが、参加できる状況ではなかったため、武道場で、父兄及び避難者対象に合唱してくれた。この光景が様々な形で報道され、辛い避難生活の中での明るい話題として心を和ませてくれた。

避難所内で「自転車ほしい」という要望が複数出たため、南材地区のいたる所に自転車を譲ってほしいと貼り紙をしたところ、15台集まった。その自転車を皆に自由に使ってもらった。自転車で他の地域へ行き、知り合いの農家からネギなどの野菜をもらってきてくれた人もいた。

避難所運営がスムーズに行われたのには要因があった。まず1つは、平成17年から地域で総合防災訓練を実施していたことである。平成19年からは避難所となった八軒中学校とも連携し、同校で防災訓練を行った。東日本大震災の2日前にも、同年の防災訓練について打合せをしたばかりで、避難所を開設したらどう動く、ということが頭に入っていた。さらに、地区の昔からの住民とマンション住まいの新住民が、小学校の諸行事を通じて顔見知りになっていたことも大きい。こうした諸行事は、地域の人が出会う良い機会になる。震災後も、「防災訓練」にひと工夫して、様々な世代に防災の重要さを認識してもらうことをテーマに活動を継続している。地道な活動が、ひいては「自助」・「共助」のありかたを見直すきっかけにもなるかと思う。



開催地より

非常にわかりやすいお話で、参加者は皆熱心に聴いていた。地域での地道な活動が「自助」・「共助」の拡充につながることを改めて認識することができた。本講演を受けて本市では、実例をふまえた防災訓練の実施と、防災リーダー育成や避難所運営組織の強化に尽力していきたいと思う。